



Title	The Aspern Papers にみる「ロマンチックな調和」
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1994, 34(2), p.91-102
Issue Date	1994-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/15331
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T09:59:58Z

“The Aspern Papers” にみる「ロマンチックな調和」

中 村 嘉 男

“A Romantic Harmony” in “The Aspern Papers”

YOSHIO NAKAMURA

I

“The Aspern Papers”には作者の James が New York 版の序で述べているような「ロマンチックな調和」がはたしてあるのだろうか。その序で物語の背景となったものを懐かしみながら、James は「物語全体の中でロマンチックな調和を作り出しているもの」¹⁾をほめそやしたい気分になっている。だが、Wayne C. Booth はこの気持ちの動きには根拠がないと見る。Booth は、最初“Notebook”でほとんど言及されなかったイタリアのロマンチックな思い出が“New York”版の序では前面に出され、それが物語を説明するどころか、逆に分裂させていると見るのだ²⁾。というのも、彼によれば、自国アメリカの大詩人 Aspern を崇拝する話者は昔 Aspern と愛し合った女性の所有していると思われる恋文を手に入れようと画策するが、その自己中心的なやり方が、彼の喚起するロマンチックなヴェニス³⁾の風情に私たち読者が共感するのを妨げてしまうからである。

Booth の主張する分裂は Walter F. Wright や Susanne Kappeler のように話者を一貫して厳しく批判すれば³⁾、さらに拡大せざるをえない。ところが、最近、話者の身勝手さだけでなく、彼の人柄の別の面も見ようとする研究も増えてきた。例えば Adrian Poole は、話者が *The Merchant of Venice* からの引用と思われる言葉によって自分自身への“judgement”を下していることも考えられないことではないと、話者が自己批判力をもっている可能性をほのめかし⁴⁾、Philip Horner も1888年の初版と New York 版を比較しながら、改訂されたところが、Booth の言う通り話者の“immorality”を強調しているにしても、そのこと自体を話者が自覚しているのではないかと見ている⁵⁾。また Millicent Bell は話者を悪い男ではないが「軽い」とみなし、その軽率な振舞いの数々を並べたてながらも、彼の人柄の善し悪

しについては決定不可能だと論じている⁶⁾。

以上見たように、話者に対する厳しい見方はかなり修正されてきている。しかし、彼の人物については判断不能の状態にとどめられて、物語の「ロマンチックな調和」は、もしあるのなら、回復されるまでにいたっていない。調和に少しでも関係がありそうな人物は、不幸な愛の結末を見事に克服する Tina だけである。が、この Tina を話者は最後に見ずため、彼女に対する肯定的評価から彼は切り離されて論じられることが多いのだ。例えば Bell は、話者による彼自身についての話がみじめな失敗談でも、Tina についての話は“a modest triumph”を勝ちとっていると述べている。確かに Tina は見事な成長を遂げ、成長の跡は、話者へのプロポーズを断られたあと彼女がとった態度にはっきり認められる。しかし、彼女はこの成長を独りでなし遂げたわけではない。いかにすげなくされたとはいえ、話者との関係において彼女の成長は実現されたのである。また、彼女の「勝利」と言われているものも話者の語りによって保証されており、話者は彼女との個人的な関係を通してだけでなく、自分の語りを通して彼女の勝利に深くかかわっているのだ。それゆえ彼の語りにある調和が生まれてきても不思議ではないと考えられる。

この考えに立てば、調和が生まれるのは、Tina の成長を目撃することによって話者の自己中心的な世界が壊れるときであろう。そしてまたそのときは、話者が Tina の愛を受け入れることができないため二人の関係が消滅しようとするときでもある。すると、その調和の存在を話者が確認するのは、二人の関係が完全に消滅してからということになる。すなわち調和は、仮にあるとしてもそこで話者か Tina が安らかにいこえる実体性をもたないのだ。それは、あると言ってもどこにも形が見あたらず、ないと言っても心に何か表現されないものが残るような、実に奇妙な存在の仕方をしていると思われる。にもかかわらず、この調和の影のようなものは James 文学にしばしばあらわれ、そのすぐれた特質を形成しているのである。この問題について、以下物語の内容を辿りながら考察してみたい。

II

“The Aspern Papers”における話者の体験には、積極的に評価できるものは何もないようにみえる。彼は、崇拜する詩人 Asper の昔の恋人 Juliana Bordereau がまだヴェニスで生きていることを知り、彼女が所有していると思われる Aspern の恋文を手に入れたいと切望する。それで彼女の古びた広大な家に間借りし、彼女の姪 Tina が自分に寄せてくれる好意を利用するが、Tina からしまい恋文と一緒に彼女自身も受けとってくれとプロポーズされ、あわてて逃げだしてしまうのだ。こ

の Tina との関係は、若き日の Aspern と Juliana のロマンチックだったと思われる愛のこっけいで哀れなパロディとしかみえない。が、ポスト・ロマン主義の小説家 James にとっては、このようなみすばらしい関係の中にも、生きることの大切な意味が見い出されるのである。

では、いかなる意味がその関係から生まれたのか。簡単に言えばそれは、Tina の成長を目撃することを通して話者自身が成長する契機をえたということだが、その一つの結果として彼の女性に対する見方が大きく変化したと思われる。物語の最初で彼は、女性に対してやや侮蔑的な見方をしていた。彼は、人々との交渉を断って広い邸内に引きこもって暮らす Juliana Bordereau との接触の方法を考えあぐね、ヴェニスに住む同国人の友人 Prest 夫人に相談したところ、彼女からその邸内に下宿人として住みこんでみたらと大胆な提案をされ、次のように考えたのだ。

It is not supposed easy for women to rise to the large free view of anything, anything to be done; but they sometimes throw off a bold conception. (3)

一般に女性は男性より狭い見方しかできないという話者のこの考えは、物語が終わる頃には大きな修正を受けることになる。狭い見方しかしていなかったのは、むしろ男性である自分の方だったことを彼は自覚させられるのだ。

もっとも、視野の狭さとかエゴイズムは、James 文学においてしばしば人を積極的に行動させる力にもなる。話者もまた、Aspern を神のようにあがめ、その若い頃の恋文を子供のように欲しがることによって、Mildred Hartsock が Wallace Stevens の言葉を借りて述べたように “the lunatic of one idea”⁸⁾ となり、すこぶる行動的になる。その行動は、話者が十分自覚しないうちに自己中心性を強め、Juliana と Tina に大きな迷惑をかけ、結果的に前者を死へ、後者を独りぼっちの空白な生へ追いやってしまうのである。

しかし、話者がとった行動の意味は、今述べたように否定的に総括してすべてがいつくされるほど単純ではない。問題を複雑にしているのは、二人の女性の何十年にもわたる閉された生き方である。Tina によれば、彼女と伯母の生活は、“terribly quiet” (36) であり、どのように日々が過ぎているのかもわからず、“life” と言えるようなものは何もないのだ。Tina は、“...there’s no pleasure in this house!” (39) と深い絶望の気持を話者に打ち明けたこともあった。Tina と伯母の Juliana は共にアメリカ人だが、イタリアに来て何十年も経ち、Tina の表現を借りれば、現在ではどこの国人とも言えない存在になっている。国籍を喪失し、いかなる社会にも

所属せず、死に等しい彼女たちの空白な生活を乱すのが、その自己中心性をしばしば非難される話者なのである。言ってみれば話者は、その身勝手さによって彼女たちの生に刺激と活力を与えるのだ。たとえその刺激が90を越えた老齡の Juliana には強すぎても、彼女は自分の死によって自分が一番望んでいた姪の成長を一気に促進するのである。

さらに話者は、二人の女性の生活を大きく変化させただけでなく、二人から利用されるもする。すなわち彼は、Juliana から数年分の部屋代に相当する金を前もって支払わされ、さらに自分で言い出したこととはいえ、かなりの経費を払って荒れた庭を花で満たさなければならなくなる。のみならず、ついには彼自身が有効利用されそうになる。つまり彼は、Tina の行く末を心配する Juliana からその結婚相手に望まれるようになるのだ。言ってみれば、話者は二人の女性にとり入って恋文をせしめようとするが、女性たちは話者その人を手に入れたいと思い始めるのである。

彼女たちがこのような気持ちになったのは、恋文についての情報を欲しがらるあまり Tina に思わせぶりの態度をとった話者にも大きな責任があったかもしれない。しかし、話者の Tina への接触の仕方を見てみると、思わせぶりの態度をとったあと彼はすぐに Tina に自分の仕事の内容を正直に告白しており、一方的に彼女を騙したわけでは決してない。このときの模様を詳しく見て、いま述べたことを確認してみよう。

話者は、Juliana の家に住み込んで三ヶ月たっても恋文の手掛かりどころか二人の女性に接触する機会さえつかめなかったが、或る蒸し暑い夜、いつもより早く帰ってみると花が一杯咲いている庭に Tina がいることに気づく。彼女は伯母からおまへは “a worry, a bore and a source of aggravation” (57) だと言われ、庭に出ていた。恐らく Juliana はこのとき、姪の行く末を案じるあまり、姪と話者の関係が発展することを望んで部屋から出したのかもしれない。Tina は伯母の気持ちをこの時点ではまだ理解しておらず、単純そのものといった態度で話者に接し、彼に新鮮な驚きを与えるが、別れ際に彼にいつまた会ってもらえるかと尋ねられ、明日でもかまわれないが自分の好きなようにはできないと答える。

話者が誤解されても仕方のない振る舞いをするのはこのときである。すなわち彼は、“you might do a few things *I* like” (61) とまじめな顔をしてため息をつくのだ。これに面くらいながら Tina は、話者に新たな興味をもちだしたのか、彼の読書について尋ねる。話者が思い切って Aspern の詩を寝る前に読んでいると打ち明けると、Tina は伯母が昔 Aspern と親しくしていたと無邪気に応じる。そこで話者は待ってましたとばかり彼について熱心に聞き出そうとするが、Tina はそれに困惑し、疑念を抱き始め、“Do you write about *him*—do you pry into his life?” (65)

と尋ねる。彼女の人の良さにつられたのか、あるいはそれを無意識のうちに利用しようとしたのか、話者は一瞬ためらったあと大胆にも “Yes, I’ve written about him and I’m looking for more material. In heaven’s name have you got any?” と今まで隠してきたことをすべて白状してしまう。これにびっくりした Tina は以後二週間姿を見せない。

以上見た通り、Tina は自分が言い寄られたと思った直後に話者自身から自分たちに接近してきた真の理由を知らされる。彼女には彼の奇妙な思わせぶりの意味がこの時点でやっとのみこめたのである。以後話者は、誤解を招く恐れがないほど明瞭に自分が恋文に夢中であることを言動にあらわし、Tina もそのことを十分に承知していた。つまり彼女は、話者の思わせぶりに騙された無知な被害者ではないのである。

二週間姿を見せないで Tina が何を考えていたか分からないが、どうやら彼女は自分から伯母に話者の正体を明かすことはしなかったようである。明かせば伯母の怒りが爆発し、話者が居られなくなると考えたのかもしれない。とすればそれは、彼女が話者に特別な気持ちを抱き始めていることを示していると見なせる。この彼女の気持ちは、数週間後 Juliana の勧めで話者が Tina をゴンドラに乗せて市中見物に連れ出したとき、一層明瞭になる。Tina は何十年ぶりの行楽に “a tourist just arrived” (76) のように喜ぶが、それに水をさすように話者はしつこく恋文の話を持ち出す。Tina は、そのような話者の関心は伯母を必ず激怒させるだろうと忠告するが、話者はその忠告を聞くどころか、“Then she has papers of value?” (78) と恋文への関心を一層刺激され、さらにしつこく聞き出そうとする。これに Tina は顔を曇らせ、奇妙に疲れた表情をする。恐らく彼女はこのとき、話者が求めているのは恋文であって自分ではないことを改めて確認したであろう。それでも、彼女の話者への好意は消えることはない。彼女は、“The Beast in the Jungle” や “The Jolly Corner” で、主人公の男性をその自己中心性にもかかわらず愛し続ける、やさしい思いやりのある女性たちと同類である。それで彼女は、ゴンドラ遊覧が終わったとき、“I’ll do what I can to help you” (85) とあくまでも話者への配慮を忘れない約束をする。それなのに話者がその夜寝つかれずに思うことは、彼女のやさしさのことではなく、恋文が安全に保管されているかどうか心配だということだけである。

しかし、話者がこれほど身勝手でも、それを承知で彼に尽くす Tina は、男に利用される哀れな女ではない。彼女は、自分の気持ちに従って行動できる一人の自立した女性である。確かに、話者と知り合ったころの彼女は、車椅子生活の Juliana の世話をするだけで自分自身の精神生活ももたないように思われた。その姿は話者に最初 “futile” (31) だという印象さえ与えたのだ。しかし彼女は、容姿のさえない中年女性であるにもかかわらず、その素朴さが型にはまらない命の動きを伝える James

的な女性の魅力を与えられていて、その魅力に自立していく女性の強さも徐々に加わって行くのである。

Tina の自立が目立ち始めるのは、Juliana の容態が悪くなりだしてからである。Juliana は、話者の正体をうすうす察知したのか、彼に Aspern の小さな肖像画を見せ、いくらで売れるか尋ねるが、話者が Aspern を知らないふりをすることにひどく腹を立て、そのため容態が悪くなるのだ。これを機に二人は対立を深めるが、Tina は二人の間に立ち、両方にできる限りの誠意を尽くすことによって、徐々に独り立ちしていくのである。そして、Tina がさらに飛躍的な成長を遂げるのは、話者が恋文を探しに Juliana の部屋に忍びこんだところを彼女に見つかり、彼女の激しい怒りを招いて、それが因で彼女が亡くなるという大事件が起こってからである。これを機に急展開する状況の中で Tina がどのように成長したのか、次に見てみたい。

III

Juliana が話者への激しい怒りのため発作を起こして危篤状態になっているとき、いたたまれず旅に出た話者は、10日以上も留守をして再び帰って来たとき、幾つもの驚きに出くわす。まず Juliana はすでに亡くなっていて、葬式もすんだことを召使いから知らされる。Tina はさぞ怒っているだろうと話者は覚悟するが、その予想は見事にはずれ、彼女は喜びの表情を浮かべ彼を迎えてくれる。さらに Tina から全く思いがけない提案をされ、話者はまたもやゴンドラに乗って家から逃げだす羽目になるのである。彼女の提案は、伯母の保管してい恋文を渡す条件として自分と結婚してくれというものであった。それに話者はきちんと対応できないほどうろたえ、不様な逃走を繰り返すことになったのだ。

Tina のプロポーズの仕方は、Aspern の恋文を「他人」に見せることを伯母はひどく嫌っていたが、話者が彼女の“relation”になってくれるなら話しは違ってくるだろうという婉曲的なものであった。Tina はこの提案を Juliana から指示されたわけではなく、亡くなるまでの伯母の気持ちの動きと自分自身の気持ちから独力で考え出したと思われる。伯母は自分の死後恋文が燃やされることを望んだが、何よりも姪である私の幸福を願ってくれていたと Tina は理解し、思い切った行動に出たわけだ。話者に向かって“I'll give you everything, and she'd understand...”と懸命に訴える Tina は、もはや話者が最初に感じた“futile”な女性ではなくなっている。しかも彼女は、この大胆なプロポーズが相手から逃げられるという屈辱的な失敗に終わったあと、見事にそれに耐えることによって飛躍的な成長をとげる。このとき彼女は、自分と話者との空しくこっけいな関係を何か特別意味あるものに変質させる

のだ。

まず話者に逃げられた Tina がとった最初の重要な行動は、話者への思いを断ち切るため伯母から預かった恋文を残らず燃やしたことである。そして、逃げ出したくせに恋文への未練から次の朝またのこのこ現れた話者に二人をつなぐものはもはや何も残されていないことを明らかにするのだ。このとき彼女の態度が、話者に一生忘れることのできない感銘を与えることになる。彼女は彼に恨みがましい表情や態度は一切見せず、実に淡々として彼に接し、話者はその姿に思いもかけなかった美しい変化を認める。

Poor Miss Tina's sense of her failure had produced a rare alteration in her, but I had been full of stratagems and spoils to think of that. Now I took it in; I can scarcely tell how it startled me.

She stood in the middle of the room with a face of mildness bent upon me, and her look of forgiveness, of absolution, made her angelic. (141)

美しく変わった Tina を見て話者は一瞬、“Why not, after all—why not?” (142) と、彼女との結婚も考えられないことではないのでは、と思う。が、そう思っているとき彼女から “Goodbye” と別れの挨拶をされ、恋文が燃やされたことと、彼女の訣別の意思を知らされるのである。

この間話者はただ驚くのみであったが、あとで思い返してみても、彼女の心の大きさを改めて認識する。話者の推測では、話者が彼女のプロポーズから逃げ出したのは彼が恐怖に襲われたからだと思いたらしい。その推測が大げさではないほど話者は不様な態度をとった。それにもかかわらず Tina は、すぐ次の日にこのこ姿を現した話者に向かって静かに「微笑すること」ができたし、落ち着いてきちんと彼に別れの挨拶をすることもできた。要するに、彼女は “the force of soul” をもっていたのだと、話者はあとになって彼女をたたえる。それは、この上なくみじめな状態の中で、そのみじめさを引き起こした本人に対して、恨みも憎しみも越えてやさしく対応できる力のことを言っているのだが、単に精神的にすぐれているだけでなく、肉体的にも充実した力になっていたとおもわれる。それは、Tina の全身にいきわたり、彼女を若々しくみせ、話者は思わず彼女との結婚もかんがえられないことではないと思っただけである。しかもそれは単に彼女の内で充実していただけでなく、そのことを通して話者を驚嘆させ、彼女を彼にとって一生忘れられない存在にするほど、外部への影響力ももっていたのである。

また彼女は、話者に預けていた Aspern の肖像画が売れたと偽って話者が送ってきた多額の現金を、送り返したりするかたくなさを見せることなく、感謝して受けとる。生活手段をもたない独り暮らしの中年女性にはお金が必要だという道理に彼女は従うのだ。話者の謝意を彼女がそのように穏やかに受容してくれたことに、話者はまたほっとするのである。

もちろん、大へんな時間と金を使って徒労に終わったばかりか一人の罪のない女性に悲しい思いをさせた自分の行いを話者はことさら明るく見せようとしているのではないかという疑いも考えられないことではない。Tina のとった行動は彼の言っている通りだとしても、彼女の表情については、彼の理解しているように恨みや憎しみから解放されていたという解釈でいいのだろうか。平均的な人間の自然な反応としては、Tina のそれはすばらしすぎて信じ難いように思われる。もともと彼女は、社会的なしきたりに対する無知とかそれに縛られない気持ちの正直な表白によって話者をしばしば驚かせていた。彼女の人柄の良さ、純真さ、誠実さは、思わず話者が利用しようという気持ちになるほど、無防備にさらけ出されていたのだ。それほど人の良い彼女であるがゆえに物語の最後ですばらしい成長をみせるのは、一見無理がないようにも思われるのである。

しかし、自然で無理がないのは彼女が話者のために動くようになる前までであり、それ以後の彼女は生来の人柄の良さに従いながらも、自己判断に基づいて多少無理をしながら行動したのではあるまいか。その彼女の努力が最後の思い切ったプロポーズにつながったように思われる。さらに、それに失敗したあとの対応の見事さは、もはや生来の人柄の良さだけから自然に生まれてきたとは考えられない。少なからず人柄が良くても、また愛があっても、いや愛があるからなおさら、話者が行ったような礼を失した逃走をされたあとでは、恨みや、憎しみが生まれてくる方が自然であろう。従って、Tina の生来の人柄の良さと物語の最後の彼女の穏やかな対応とされているものとの間には断絶があり、その彼女の対応についての話者の解釈を信じるなら、彼女はその断絶を苦しみながら越えたのであろう。苦しみながら、しかもその跡も見せない見事な飛躍が彼女の成長を物語ると言えるのだ。

彼女がいかなる心の葛藤を経験したかは推測するしかないし、私たちは表面にあらわれ出たものを信じるほかないが、それを信じるなら、物語は Tina の最後の言動によって稀有な花を咲かせていると言えよう。そのことを、James が New York 版の序で述べていたように、“a romantic harmony” と称することは、決しておかしいことではないと思われる。もちろん、ここで使われている“romantic”という修飾語にいささかのアイロニーも認められない。確かにそれは、Byron や Shelley の時代において Aspern と Tina の伯母 Juliana が経験したようなロマンチック

な恋愛とは異質であろう。しかし、その中には後者のロマンチズムに決してひけをとらない、美しいものへの感動がある。同時に、いかにも James 的な、高い倫理性をもった他者との関係の展開がある。それは“romantic”という語にふさわしい理想性をもっているのである。ただ、最初にも述べたように、この調和には持続する実体性がないが、この問題については最後に、James 文学の一般的な特徴と関連させて考えてみたい。

IV

周知のように、James の作品には Tina にその特徴が似ている女性は何人も登場する。例えば、*The Portrait of a Lady* の Isabel Archer, *What Maisie Knew* の Maisie, *The Wings of the Dove* の Milly Theale, また中短編では“The Altar of the Dead” や “The Beast in the Jungle” などに登場する女性たちである。彼女たちがそれぞれ異なった状況の中で見せる根本的に似かよった特徴とは、彼女たちが試練に対処するときにはっきりしてくる。すなわち彼女たちは、生来善良であるため一見無理がないようにみえるが、実は様々な葛藤を乗り越えて、倫理的に高い価値をもつ選択をするのだ。それは、それを理解する人に驚きと感銘を与え、新しい価値に目覚めさせるのである。

言わば彼女たちは思いがけなくポジティブな他者性を見せるわけだが、この種の他者性の出現こそ、James 文学を貫く重要な倫理的テーマであると言えるだろう。在欧のアメリカ人作家として彼は、アメリカ人の目で欧州及び欧州人を、逆に欧州人の立場でアメリカ及びアメリカ人を捉えて、しばしば作品化した。その二重の視点を可能にする立場は、閉ざされた世界や思考から脱け出したいという James の幼い頃からの願いを大いにならせたと思われる。James がさらにその立場から視野を広げて、様々な形で閉ざされて生きる人々を一般的に描く場合、彼らは時におかしく、時に厳しく、また時に同情をもって取り扱われていて、最後になって彼らが開かれた場に出られる場合もあれば、出られない場合もある。また、そのいずれとも決めかねる場合もある。“The Aspern Papers” においては、話者は最後に Tina の飛躍を目撃し、それに感銘を受け、彼自身も成長したように思われる。この考えに異を唱える論者もいるが、いずれにせよ、少なくとも理解力ある読者はつねに意外な他者性を見せられ、開かれた場に連れていかれるのだ。これが、James 文学を読む喜びの一つである。

F. O. Matthiessen は、「一見いかにも空虚にみえる James の日常生活と、そこから生まれてくる彼の秀れた文学、この二つの大きな隔たりは彼を研究しようとする

ほとんどすべての人々にとって一つのなぞであった。」⁹⁾と述べている。James が空ろな日常生活を送っていたことについて何も知らない一般読者でも、彼が描く平凡な日常からどうして新鮮な驚きが生まれてくるのか、不思議に思い続けるかもしれない。Matthiessen にとってそのなぞを解く鍵は、James が「些細な事実から深い意味を引き出すことができる人物だった。」ことにあるが、別の言い方をすれば、それは、閉ざされた平凡な世界にひそむ他者性という驚異を探りあてる倫理的な力を彼が持っていたことに求められよう。

この James の倫理性は、最初に述べた「ロマンチックな調和」の実体性の欠如にも典型的にあらわれていると思われる。調和がそれ自身の存在を持続させる実体をもたないということはまた、それが人々をそこに包みこみ慰撫し安息させる場をもたないということであり、それは他者性の驚異と同じように、新たに遭遇して体験される以外にはないということである。Tina という驚異は話者の前から姿を消す直前に生まれ、いなくなってからその存在が確認されたが、話者がそれをもっとよく見たいと思って彼女にわざわざ会いに出かけても、それを体験することは二度とできないであろう。それではそれは無に消えたのかというと、決してそうではない。それは忘れたい思い出として残るだけでなく、新たな驚異との出会いの可能性を心の中に準備したのである。いやそればかりか、自らが驚異となる可能性さえ準備したと言えるかもしれない。ここに、James の読者が、彼の話者や主人公たちに倣って成長する契機があると言えるであろう。

Notes

- 1) Henry James, "The Aspern Papers," Vol.12 in *The Novels and Tales of Henry James*, 26 vols.(New York: Charles Scribner's Sons, 1908), p.vii.
なお、このテキストから引用する文の頁数は本文中に示す。
- 2) Wayne C. Booth *The Rhetoric of Fiction*, 2nd ed. (1961; rpt .Chicago: Univ. of Chicago Press, 1983), p.363.
- 3) Walter F. Wright, *The Madness of Art* (Lincoln, Nev.: Univ. of Nebraska Press, 1962), p.103.
Susanne Kappeler, *Writing & Reading in Henry James* (London: Macmillan Press,1980),pp.22-43.
- 4) Adrian Poole, "Notes", *The Aspern Papers and Other Stories* (Oxford Univ.Press, 1983),p.202.

- 5) Philip Horne, *Henry James and Revision* (Oxford: Clarendon Press, 1990), pp.265-271.
- 6) Millicent Bell, *Meaning in Henry James* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1991), pp.185-203.
- 7) *Ibid.*, p.203.
- 8) Mildred Hartsock, “Unweeded Garden: A View of ‘The Aspern Papers’”, *Studies in Short Fiction* V (1967), 60-68; rpt. in *Tales of Henry James*. ed. Christof Wegelin (New York: W.W.Norton & Company, 1984), p.468.
- 9) F.O.Matthiessen, 『ヘンリー・ジェームズ—円熟期の研究』(研究社、1972),p.6.

(1993 年10月29日受理)

